

「家族が語る もうひとつのハンセン病史」

2019年12月13日（金）

（3人目）

ロシータ・ハルン（マレーシア 第二世代）



ロシータ・ハルン氏

皆様こんばんは。私はロシータと申します。私はマレーシアから参っております。

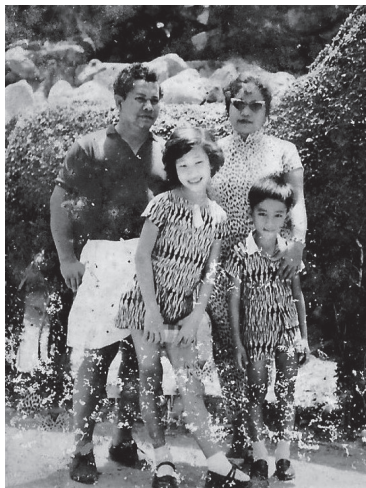
私はイスラム教徒の両親によって育てられました。セランゴールの福祉施設からイスラム教徒の両親のもとに養子に出され、育てら

れました（写真①）。

この養父母は愛情深く、養父母と過ごした子ども時代は、本当に幸せなものでした。休暇になるとポートディクソン、キャメロンハイランド、ハジャイなどさまざまな場所を旅行しました。

養母は編み物が好きで、同じく養子であった兄と私のお揃いの服を作ってくれたり、料理上手で、西洋料理、マレー料理を問わず、美味しい食事を作ってくれたりしました。

私は結婚して5人の子供を授かりましたが、養父母は孫ができたことを非常に喜び、ドライブに連れて行ったり、散歩に連れて行ったり、チョコレートなどで甘やかしてくれます。



写真① 養父母と幼い頃の私と弟

夫がイギリスで勉強している時には、わざわざイギリスまで私たちに会いに来てくれました。

養父母は、私が小さい頃、「お前は私たちの実の子だ」と言っていました。小学校の入学時に出生証明書が必要となり、友達に出生証明書を提出したのに、養父だけはそうはせず、登録時に教師に面会に行ったのです。

6年生の時に、養父が教師に見せていた出生証明書ではなく、養子縁組証明書を見てしまったのです。その時に、養父母は実の親ではないということを知りました。

実の親を探そうとは思いませんでした。ただ、なぜ私を福祉施設に送ったのか、捨てられたという思いは、その後もずっとつきまといました。

イスラム教では養子縁組は許されており、養子に出された子どもは、親がイスラム教徒であっても、そうではなくても、親を知ることが義務であるとされています。祖先を知らなければ、イスラム教では禁じられている近親との結婚も可能になってしまうこと、そして遺産の問題が出てくることもあり、信仰の後押しをもって、実の親を探そうと思ったのです。

養父母は素晴らしい人たちで、実の親を探すことで彼らを傷つけたくなかったのも、実際に私が実の親を探し始めたのは、養父母が他界した後、私が59歳になってからのことでした。

親探しの第一歩は、住民登録所からでした。親探しはさほど難しいものではありませんでした。養子縁組証明書の裏面に、私の出生証明番号があったからです。ものの何分かで、役人が私の出生地は、スンゲイブローハンセン病センターというところで、出生証明書の名前は、ウォン・アー・ルイであることを教えてくれました。その時初めて、そのような場所が存在していること、そして私が中華系であることを知ったのでした。

夫に、自分の実の親はハンセン病の患者だった

ことを告げました。驚いたことに、夫は、「何を待ってるんだい？早く探すんだよ。どんな結果が来ても大丈夫だから。まだ存命かどうか、早くしたほうがいい。もしもまだ存命なら感謝して、一緒に会いに行こう」と言ったのです。妻の実の親がハンセン病患者だったことに何も動じない夫に驚くとともに、感謝しています。私の支えです。

2013年の後半になり、一般の訪問者が自由にスイングロー療養所を訪れられる日が企画されていることをニュースで知りました。その主催者であり、ハンセン病患者だった両親のもとに生まれたというジョイス・ウォンさんに連絡を取りました。ウォンさんは、実の父がまだ健在で、療養所で暮らしていることを教えてくれました。

あれこれと調整をし、2014年の中国暦の元旦に、実父ときょうだいに会いに行きました。「ケア&シェア」サークルの創設者であるエニー・タンさんは、自身の家族と過ごすはずのお正月休みを、この日のために切り上げて、ペナンから戻ってきてくれました。エニー、ありがとう。

実父に会う前は心配の塊でした。会ってどうなるのか、何が起こるのか分からないからです。病棟に到着すると、もう涙が止まりませんでした。私にはナンシーという名前の実の妹がいたのです。そしてそのナンシーが父に紹介してくれました（写真②）。

ナンシーが父とマレー語で話しているのを聞いて驚きました。ナンシーも父に育てられたのではなかったのです。ナンシーは修道院のホームでシスターたちに育てられたそうです。それを聞いて、悲しくなりました。

病棟に入ってすぐは、少し怖いと思っていまし



写真② 父（中央）と妹（左）との再会

た。怖いと同時に期待も高まっていました。本当にこの人は私の実の父親だろうか？ナンシーは本当の妹？本当にこの人たちは私の家族なの？会ってから、少したって夫が言った「お父さん、君にそっくりだね」という言葉で、気持ちが一気にほぐれ、幸せの涙がこぼれました。61年以上、会ったこともなかった父親を固く抱きしめながら。

妹は旧正月を祝うために、サバからクアラルンプールを訪れていたのですが、親戚全員に、父のもとに集まるように連絡をしていました。ナンシーと家族、弟とその家族の全員です。その時、夫と私が、このウォン家に温かく迎え入れられているのを感じました。エニーたちがケーキを用意してくれており、みんなで再会を祝して、マレーの歌「ラサ サヤン（愛という気持ち）」を歌いました。

初めて会ったばかりの父にケーキを食べさせました。スプーンを口元に運び、感謝の気持ちを抑えることができませんでした。父との間の61年にも及ぶ空白の年月の果ての再会ですから、何にも代えがたい貴い瞬間でした。

翌日、夫と私は、子どもと孫を連れて「おじいちゃん」に会いに行きました。数日後、長い長い間失われていたきょうだいを我が家に呼びました。父は高齢のため参加できませんでしたが、人生最良の日と言ってもいい日でした。次の日、全員が映っている写真を父に見せると、嬉しそうにしていました。

何日か後、ナンシーと私は他にもいるはずのきょうだいを探すことを決めました。高齢の父が他界する前に、両親の子ども全員で集まりたかったのです。エニーと共に、住民登録所に行きました。きょうだいの誰かが、親を探していないか調べるためです。残念ながら、父を探している人は誰もいないことが分かり、落胆しました。

再会のあと、何日間かナンシーはクアラルンプールに滞在しました。私と時間を過ごすためです。ナンシーは両親のこと、そして自分のことを話してくれました。父は高齢で、記憶もあいまいになっていることが多いため、ナンシーに聞くことは山のようにありました。

ナンシーは養子に出されたのではなく、中学校

に入るまでブキツ・ナナ修道院のシスターたちに育てられたこと。父はナンシーに会いに修道院を訪ね、ナンシーも両親に会いにスンゲイブローを訪れていたこと。一晩過ごすことはできなかったものの、家に遊びに行くことはできたのです。シスターたちに育てられたので、中国語は話せず、英語とマレー語しか話せないのです。

ナンシーとナンシーの夫のアレン・コーが、父がハンセン病を患っていたことを知っていても、気にせず、父に会いに行き、あれこれと手伝いをしてくれていたことに感謝します。自分たちの子どもを連れて、父に会いに行ってくれていたことも。

母は病気が治り、スンゲイブローを退所できたのですが、治療を継続していた父と暮らすために、スンゲイブローにとどまりました。母はナンシーを訪ねて、ケランタンまで出かけたり、ナンシーの家族が何度か引越しをした際には、一緒に引越し先に行ったりもしたそうです。

ナンシーによると、両親は手放さなくてはならなかった子どもたちについては、一言も話さなかったそうです。ナンシーが両親に、なぜ子どもを探さないのか聞くと、母はこう答えたそうです。「どうやって探すって言うんだい。子どもを養子に出すことに同意します、という紙に署名をして、養子に出してしまったのに」。養子に出された私たちよりも、両親の悲しみはもっと深かっただろうと思うと、辛くてたまりません。

父に会いに行き、親であれば手放してしまった子ども、会うことができない子どもにどうしても会いたいという気持ちは何より強いと言われました。乳児のころに親から引き離されたことによって、病気に感染するリスクは減りました。しかし、子どもを親から引き離すという行動は、非人道的で、認めることができません。

当時、ここにいる男性が、本当に自分の実の父親なのかと思ったこともありました。イスラム教の教えでは、親族ではない男女は親密な接触は持つてはいけないとされています。このため、実父であることを証明するため、スンゲイブロー病院でDNAテストを行いました。このテストもエニーと病院とのおかげです。

25日たって結果が出ました。99.999%のDNAマッチ、実の父親であることは、間違いのないという非常に嬉しい結果でした。

父が亡くなる2年前の5月に、父の95回目の誕生日を祝いました。父に再会できたことを、神に心から感謝します。

残念なことに、母は再会が叶う13年前に他界していました。

旧正月には、中華系のきょうだいと共に、正月を祝います。そして、ハリ・ラヤには、きょうだいが我が家に来て、一緒に祝います。

皆さんに私の長い旅路を聞いていただきましたが、いくつかお伝えしたいことがあります。

ハンセン病患者のもとに生まれた子どもも、ごく普通の人生を送ることができるのです。私のように。私は現在66歳ですが、ハンセン病の症状は出ていません。

私は、メディアはハンセン病について十分に取上げていないと思います。病気にかかった人は、目に見えない存在となり、周囲の人たちは病気にかかった人たちと関わるのを恐れるようになります。しかし科学の発展により、ハンセン病は治る病気になりました。社会はそれをきちんと知るべきです。そしてNGOやメディアはハンセン病の啓発活動をもっともっと強化すべきです。

ハンセン病のために、親から引き離された子どもたちは、是非とも早く親を探してあげてください。親はこの世から去る前に、一目でもいいから子どもに会いたいと切望しています。

この世に起きるすべてのことは、いいことも悪いことも、神の思し召しです。

病いも、治癒も、神が人類に与えた試練であり、審判です。私にとっては、このハンセン病という病気も、心平らかに受け止める人生の一部です。

病気にかかりたいと言われれば、誰も進んで病気にかかりたいという人はいないでしょう。

ハンセン病にかかった人たちも、自ら選んで病気にかかったわけではありません。ハンセン病にかかった人たちの人生も、私たちと同じ人間として、受け止めてほしいと思います。

いつも支えてくれたエニーとシンポジウムの主催者に、私の経験を話す機会を与えてくれたこと、

ハンセン病患者のもとに生まれた子どもの1人として、皆さんにお話をする機会を与えてくれたことに感謝しています。ありがとうございました。

(翻訳：星野奈央)